

---

# ハッピー?...ハッピー！

shuugo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハッピー？…ハッピー！

### 【Nコード】

N6833E

### 【作者名】

shugo

### 【あらすじ】

組織を潰した後、志保と快斗は警察によって逮捕されてしまう。2人の帰りを待っている新一。そしてある日、待ち続ける新一にようやく2人が…それから幸せまでの軌跡。

## プロローグ「待っている」

警「薬物取締法違反で宮野志保を窃盗罪で黒羽快斗を逮捕する。」

そう言われて、志保と快斗が大量の警官に取り押さえられた。  
…俺は何も出来なかった。組織との戦いでは助けられたのに。  
微かな抵抗も無駄だった。

2人が連れさらわれる寸前、警官の隙を突きパトカーの方に寄り、  
新「志保！快斗！…俺…俺…待っているいるから……  
お前らが帰ってくるのを…絶対に待っているから！！」  
と叫んだ。

なんとか聞こえたらしい。志保と快斗は涙ぐみながら、  
うなずいてパトカーの中に入っていた。

あれから3ヶ月。

俺は今でも毎日家の前であいつらを待っている。

………志保…快斗…元気にいるか？早く帰って来い…待ってるから…

## 第一章「おかえり」

3ヶ月前俺は、FBIやCIA・服部・快斗・灰原達の協力で、組織を潰すことに成功した。そこで得たAPTX4869のデータを元に

灰原が解毒剤を完成させ、俺と灰原は元に戻った。

しかし、元の姿に戻った俺らが次に見た光景は…

警察に取り押さえられた快斗…そして志保に拳銃を突きつける大量の警官だった。

……志保と快斗が捕まった。

志保と快斗が何をした？

薬物を作った？物を取った？

そんなの昔の話じゃねーか…

反省して…後悔して…やめたじゃねーか…

これから前を向いて歩こうとしてたじゃねーか…

それなのに…それなのにどうして…

結局俺には待つことしか出来なかった。

無性に殴りたいこともあったが、実行したらあの2人が悲しむから堪えた。

俺は今家の前で待っている。

…もちろん学校に入っていない。

…ただ……ただ志保と快斗が帰ってくるのを信じて待っていた。

ポツ

雨が降ってきた。最初は小雨だったが、やがて激しくなった。

ザー………

激しくなっても新一は傘を開かなかった。

この雨が、全てを洗い流してほしくて…

グラ

しばらく立っていると、意識が遠くなってきた。

…限界だと思ったその時、

？「新一！？」

？「工藤君！」

待ちわびていた声が聞こえた。

切れそうな意識を何とか保ちながら、声のしたほうを見た。

新「…し…ほ？…かい…と？」

恐る恐るたずねると、

快「ああ…そうだよ」

あのころと変わらない声。…俺は目から涙があふれた。

新「…お…か…え…り」

俺が途切れ途切れに言うつと、二人は微笑み

快&志「…ただいま」

と言った。

俺は軽く微笑み、意識を手放した。

## 第二章「新たな住人」

新「ん……」

朝日が昇ったところ、新一は目を覚ました。

…あれ？俺…どうしたんだ？えーと…待っていると雨が降ってきて  
……  
！！！！！！

俺は思い出して、ドタドタと階段を下りた。しかしその途中階段を踏み外し、

ゴロゴロゴロゴロ…バー…ン！！

思いつきり転がって、背中を打った。すると、

カシヤ

カメラ音がした。音のした方を見る。すると、

快「新一の恥ずかしい姿ゲットだぜ」

某アニメの真似をしながら、くすくす笑っている快斗がいた。

新「快斗！！」

志「もう少し大人しくしなさい、工藤君は風邪を引いているのよ」

呆れた顔をした志保が奥からやってきた。

新「志保！！」

快「おいおい…あんまり大きな声出すなよ。耳いてーだろ？」

イタヅラっぽく快斗が耳を押さえながら、笑って見せた。

…気障な台詞。……本物だ…夢じゃなかったんだ。

新「良かった…本当に良かった」

俺は小さく呟いた。

それから俺らはリビングに向かい、いろいろ話した。  
… 刑務所の中のことなど長時間話していた。

ふと、志保が思い出したような仕草を見せたので、

新「どうした？ 志保…」

志「あ、いや、… 住む所どうしようかなーって」

新「あ… そうか。」

俺は、あることを思い出した。

阿笠博士が結婚したのだ。

… フサエさんと。

そのまま志保も、住んでもかまわないと二人には言われたが  
志保はせっかく結婚したんだから…と

二人の誘いを断っていた。

新「どうしようかな… アパートを借りるわけにもいかなえし…」  
しばらく考えていると、ひとつの案が思い浮かんだ。

新「俺の家に住まねえか？」

志「え？」

新「その方が金がかからなくていいし…」

淡々と話す新一に、志保の心情はというと

（いっしょに住むって… 同棲ってことじゃない／＼）

快「じゃあさっさと用意しようぜ」

新「え？ 快斗は呼んでいないぜ」

快「えー！ー！？ 新ちゃん酷くなーい？」

新「冗談だよ冗談！ さっさと行ってこい！ー！」

一方志保はというと

（何だ黒羽君もいつしよなのね…あせってそんしたわ）  
志「じゃあ私も行くわね…工藤君は安静にね」  
新「わーてるよ。」

今日から工藤邸に二人の住人が増えた。

### 第三章「怖い」

新「ふわぁぁ」

カーテンの間から日差しが差し込んできた頃、  
新一は目を覚ました。

あの日から三日。ようやく新一の風邪も治った。  
なので今日から学校に登校する予定だ。

新一は、パジャマから制服に着替え階段を下りた。

新「おはよう」

志「あら工藤君おはよう。今日は早いね」

快「おっはよ」

あれから三日たった為、快斗と志保がいる生活にも慣れた。

新「まあ、今日から久々の登校だかな」

志「そうね、もう半年以上行っていないでしょ？」

新「ああ、あいつら驚くかなあ」

快「新ちゃんはそのいう驚かしたりするの好きだからねえ」

新「うるせえ。新ちゃんなんて呼ぶな！！！！」

快「うわぁー新一が怒った。怖いよ志保ちゃん」

志「はあ、いい加減にしなさい。直ちにやめないと朝御飯にレーズンと魚を入れるわよ」

新&快「は、はい！！！！！！」

志「それでいいのよ」

志保はこの家で最強である。

新「いつてくるぜ」

朝御飯を済ませた新一が二人に呼びかけた。

志「ええ、わかったわ」

快「いつてらっしゃい」

新一が出て行った瞬間、

快斗と志保がにやつと笑った。

新一が歩いてると近くで声がした。

生徒A「え？あれ工藤先輩じゃない？」

生徒B「ほんとうだ。かつこいー」

女子達は新一を見てキヤーキヤー言っていた。

一方新一の心情はというと、

（こんな男の何処がいいんだか…快斗のほうが断然いい男だろ…）  
なんてことを思っていた。

すると後ろから、

蘭「新一！？」

と聴きなれた声がしたので足を止めた。

新「蘭…」

蘭「新一いつ戻ってきたのよ！？何で連絡してくれなかったのよ！？」

新「え？連絡していなかったっけ？」

蘭「してないわよ！ってゆうかここ三ヶ月音沙汰なしだったじゃない」

新「そうだったっけ？悪い悪い」

そういつて新一は再び歩き出した。

（え？）

そんな新一の様子に蘭が疑問を抱いた。

（いつもならホームズや事件の話とかするのに）

そう思ったが、新一はどんどん先に行くので追いかけていった。

新一が教室に入るとたんにクラス中大騒ぎに、

生徒C「く、工藤!？」

生徒D「おまえどうして!？」

生徒E「いきてたのか!？」

しかし、後ろから蘭が現れると、

生徒F「なんだよやっぱり奥さんと一緒かよ」

生徒G「いきなり見せ付けんなよ」

生徒H「工藤夫妻は相変わらずだな」

クラスメートがいつものように茶化してくる。

蘭「そ、そんなんじゃないってばー／＼／＼」

蘭は顔を真っ赤にして否定している。

もう慣れたことだけど…面倒くさい。

そう思い新一は無視して席に着いた。

その行動にクラスメートが驚き新一を見ていた。

新一はクラスメートの視線など無視して携帯を取り出した。

そして電話をかけ始めた。

トウルルルルルル

トウルルルルルル

トウルプツ

志「もしもし?」

新「あ、おれおれ」

志「何のつもり?おれおれ詐欺でもしたいの?」

新「もう志保ちゃんったらそんなこと言っちゃって」

志「切るわよ」

新「わー!悪い!おれが悪かった!切るな!切るんじゃない!」

志「で?何のよう?」

新「お前の声を聴きたくなっただけ」

志「…じゃあね」

新「冗談だよ冗談!」

志「じゃあなによ?」

新「……………」

志「…工藤…君？」

新「怖いんだよ…」

志「え？」

新「お前や快斗がまた俺の目の前からいなくなりそうで怖いんだよ……………」

#### 第四章「転校生」

志『…貴方らしくないわね。鬱陶しいくらいいつも自信満々なのに』  
新「あのなあ…」

志『心配しないで。あのことは無罪になったし、居なくなったりしないわ』

新「でもよあ…あの時は近くに居ながら何も出来なくて…今は近くにすら居ないんだぜ？」

志『貴方…勘違いしてるわよ？』

新「へ？」

志『貴方は私達に何もしていないと思ってるけど

それは違うわよ…私達が此処に居るのは貴方のおかげなんだから』  
新「へ？どういうことだ？」

志『貴方が“待ってる”って言うてくれたことが私や黒羽君の支えだったの

貴方がそう言うてくれて、本当に嬉しかった。

自分を必要としてくれて本当に…本当に嬉しかった』

新「……………」

志『だから今度は私達の番。貴方が必要としてくれる限り私は貴方のそばにいるわ』

新「……だったら…さ俺の側から離れるなよ…絶対に」

志『貴方がそれを望むなら』

新「ありがとよ。元気出たぜ！……じゃあな」

志『ええまたあとでね』

プツッ

ツーツー

俺はその音がなった後も名残惜しくて携帯の画面をじっと見ていた。その様子を蘭は悲しそうな目で見ていた。

キンコーンカーンコーン

クラスメートが新一に質問しようとしたその瞬間チャイムが鳴った。先生「チャイムが鳴ったぞ！さっさと席に着け！」

担任が入ってきた。それと同時に皆が席に移動した。

先生「よお工藤久しぶりだな！……工藤が復帰したから久しぶりに全員揃ったなっと、

……今日は転校生紹介する。しかも男女それぞれ1人ずつだぞ！……じゃあ入ってくれ！」

クラスメート達は、格好良いか何とか綺麗かなとか話している。扉が開いた瞬間皆がキャーキャー言い出した。

俺はあんまり興味ないから外を見ながらお茶を飲んでいた。

先生「えーと。今日からこのクラスの一員になった黒羽快斗君と宮野志保さんだ」

ブ――

聞き覚えのありまくる名前に新一がふき出して前を向いた

“なんだよ工藤きたねーなあ”という視線が嫌になるほど感じる。前であいづらがくすくす笑っているのを見て、俺は立ち上がった。

新「な、な、な、何でお前らがこんなところにいんだよ！？」

先生「ん？なんだ工藤知り合いか？じゃあ転校生の世話はお前に任せたぞ

じゃあ宮野は工藤の隣に……黒羽は工藤の後ろに座ってくれ」

快&志「はい」

そして志保と快斗が俺の近くにやってきた。俺は小声で志保に言った。

新「ちゃんと説明してもらおうか」

すると志保は動じることなく、

志「あら？貴方がそばから離れるなって言っただんじやない」

と、志保が俺の耳元で言ってきた。俺はその言葉に顔が真っ赤になった。

……誰にも聞こえなかったことを祈る。

その祈りは通じなかった。志保の後ろにはヤツがいるからだ。

快「えゝ？新ちゃんってばそんなこと言ったのゝ？」

……快斗だ。

志「う、うるせえ！っつーか新ちゃんって呼ぶな——！！！！」

新一の声は学校中に響いたとさ。

#### 第四章「転校生」(後書き)

ちなみに2人と同じクラスになったのは、FBIが動いたから（笑）

## 第五章「部活」

現在帝丹高校は大騒ぎだ。

そのわけは……

快「新ちゃん、志保ちゃんプレゼントだよ」

一つ目の原因はこいつ。

黒羽快斗だ。

元がいうえに頭も良く、性格も良いし明るい。

同学年にとっても人気がある。

志「何ようるさいわね」

俺の隣から毒舌をかましたこいつが二つ目の原因。

宮野志保。

綺麗な顔立ちにスラッとしたスタイル、そして結構大きな胸。

こいつは全校で人気がある。

紹介を済ませたところであいつの相手をしてやる

新「なんだよ快斗。朝っぱらからうるせーな」

快「もう新ちゃんつたら……はいこれ」

といわれそれぞれに渡したのは一つの紙。

綺麗に折りたたんであるそれを開くと

新「入部届け？」

快斗に渡されたのは、確かに入部届けだが

新「なあ快斗……俺の名前が書いてあるのはわかるが、もうサッカー部って書いてあるのは？」

完全に開いたそれには、部活名の横には筆ペンでそう書いてある。

快「ああそれ？なんかね図体のかい四十くらいの人が書いてたよ

」

その言葉を聞き俺はため息をついた。

その人物は良く知っている。

高校に入ったと同時にしつこく勧誘してきたサッカー部の顧問  
当時は探偵してたから断ったが、

新（どうしようかな…今は探偵しているわけでもないし、暇だから  
なあ）

そんなことを思っていると、後ろで快斗が入部届けを書いていた。  
何処に入るのかなあと思っていると、快斗はサッカー部と書いた。  
新「へへ。快斗ってサッカーできたんだ」

快「新ちゃんがいるからにきまつてんじゃん」

いつものこいつの調子に呆れながらも

快斗がやるなと思うそのまま出すことにした。

入部届けを出すと顧問は泣いて喜んだ。

ちなみに、志保は科学部と書いていたが提出する直前に、

快斗がサッカー部と書き換えた為、無理矢理サッカー部に入らされ  
たとき。

## 第五章「部活」(後書き)

ちなみに新ちゃんは、快斗と志保を逮捕された恨みから推理をやめました(笑)

## 第六章「少年探偵団」

新一と快斗そして志保がサッカー部に入部して以来、サッカー部は注目の的となっていた。

今日もたくさんの方が見に来たが、新一と志保は風邪を引いたので先に帰っていた。

新「ゴホゴホ。やっぱり学校行くんじゃないかな」

志「コホッ。だから休みなさいっていったでしょ」

新一と志保は一緒に下校していた。

いろいろ言い合っていると、

新「ん？あれは……」

新一が呟いた。

志保も彼の見ているほうを見る。

志「……あの子達……」

目の先にはしよんぼりしている三人の子どもが見えた。

無論少年探偵団の三人だ。

いつもの元氣のない彼らを見て、新一は志保に

新「……ちよつと行ってくる。ここで待ってるよ」

と言って三人の元へ行った。

新「おう。お前からどうしたんだ!？」

と、努めて明るく声をかけた。

歩「新一お兄さん……あのね、コナン君と哀ちゃんがなくなったの。」

二人とも……それにね、住んでいる所が分からないからお手紙も書けないの」

と、我慢していたのであろう涙が溢れていた。

そんな歩美を複雑そうに見ていた新一は、決心し

新「……そう……か。辛いかやっぱり……そうだな、コナンへの手紙なら」

俺とアイツは親戚だからな。何とかなと思うぜ」

歩「ほ、本当!？」

光「本当ですか!？」

元「まじか!？」

新「ああ、もちろん。あとは灰原哀への手紙かー。そうだ、ちょっと待ってろ」

そういつて新一は志保が待っているところに行き、

彼女に事情を話した後、志保を彼らの前に連れて行った。

新「こいつ、灰原哀のお姉さんで名前は宮野志保って言うんだ。

灰原哀への手紙はこいつに渡せば、送ってくれるぜ?」

歩「本当!？」

志「え、ええ」

事情は聞いたが、あまりの急展開に返事に戸惑った。

歩「ありがとうございます! 新一お兄さん、志保お姉さん」

光「ありがとうございます!!」

元「じゃあ頼むぜ!!」

と、いつもの笑顔で去っていった。

志「……よかったの? これで……」

新「ん? ……ああ、笑顔じゃないあいつらはあいつらじゃないからな」

志「…そうね」

と言い、二人は家に向かい歩き出した。

家の前に来るとさっそく三人の姿が。

いつもと同じように行動の早い三人に、新一と志保は顔を見合い、笑った。

そして、

新「よう、お前ら。よくきたな!!」

と彼らを元気よく迎え入れた。



## 第六章「少年探偵団」（後書き）

次回は蘭ちゃん目線で行きたいと思います

## 第七章「遠くなった人」（前書き）

蘭ちゃん目線です。

## 第七章「遠くなった人」

新一が帰ってきた。

本当に嬉しかった。

…でも帰ってきた新一は別人のようですっかり変わっていた。

そんな中で転校してきた二人。

黒羽快斗君と宮野志保さん。

二人は新一のことを以前から知っているらしい。

食事と一緒にだし、登下校も一緒に。

本当に仲が良い。

…今まで近くにいたから遠くに行ってしまったと感じる

快「おつはよ〜」

その声に振り向けばいるのは黒羽君。

そして後ろから来るのは新一と宮野さん。

クラスメートからは、もはや恒例となった茶化しが始まる。

生徒I「何だよ、また夫婦で登校かよ」

新「だから違うつつてんだろー!!」

生徒J「あ、そうか。お前ら三角関係だったか」

新「だー！ー！！そんなんじゃないねえ！！！！」

生徒K「おーおーそんなに焦っちゃって」

新「てーめーえーらー！！」

生徒L「工藤が切れたぞ！！逃げろ！！！！！！」

新「待ちやがれこのやるーーーー！！！！！！！！」  
新一がほとんど相手をして最終的には追いかける。  
そんな日々。

宮野さんはいつものように呆れ顔でいる。

以前なら私がそこにいたのに。

奥さんといわれていたあの頃の情景は此処にない。  
それもまた遠くなったと思う原因かも知れない。

新「フッフッフ。捕まえたぞてめえら」

茶化した人たちを見事に捕らえた新一が言った。  
体全体に影がかかり、目が異常なまでに光っている。

……なかなか怖いなあ

茶化した人は、新一に必死に許しをもらおうとしている。

新一は怒っているようだけどなんか楽しそう。

いつも隣にいた貴方は、もういない。

貴方はまた一歩ずつ私から離れていく

## 第八章「大阪からの訪問者」

——東京駅

此処に二人の関西人がいた。

？「久しぶりやな」東京は。…にしても相変わらずバカみたいに人がおんなあ」

これは服部平次。父親は大阪府警本部長で東の工藤、西の服部といわれたほどの名探偵

？「いちいちおんなじ反応してよう飽きんな」？」

後ろから出てきたのは遠山和葉。

平次の幼馴染で父親は平次の父親の部下だ。

平「ホンマうるさいわ」…じゃあ俺工藤んちに行ってくるからな」

快「ギャ——！！！！さ、さ、ささささ魚あ——！！！！？  
？？？」

新「うわ————！！！！レーズンまでありやがるう！！！！！！  
！！！！」

相変わらず工藤邸は大騒ぎである。

まあ、この家の中で落ち着いているということのほうが珍しいが……

新一と快斗が騒ぐ中、チャイムがなった。

そこで出てきたのは

平「よう工藤！久しぶりやな」

快「やめろ！新——！！俺に魚を向けるな！！！！！」

新「だったらお前もレーズンを俺の飯の中に入れるのをやめろ!!!」

!!!

二人は平次の存在に気がついていないようだ。

そんな二人に平次のこめかみがぴくぴくしている。

平「くおらああああ！！！！いい加減気付けやばけえええええ！」

!!!!

新「いてて…相変わらずうるせえんだよ服部は…」

新一は耳を抑えながら顔をゆがめた。

平「お前らが気いつかへんらやるがあ…!!」

快「まったく、平ちゃんは…」

平「平ちゃん言うな！それに、♪付けんな！気色悪うてかなわんわ」

快「平ちゃんとは顔の色が違うの！」

平「せめて質が違うって言わんかい!!」

快「平ちゃんってば自覚あるんじゃない♪」

平「だー!!工藤!!こいつを黙らせてくれや!!」

新「はい!魚」

快「はい!!!!!!黙ります!!!!!!黙りますから魚だけはああああ!!!!!!」

平「さつすが工藤やな」

新「まあ、こいつはいつもうるせえからな」

快「こいつ言わないでよ♪」

志「…貴方たちうるさいわよ…何でも良いから早く昼食食べなさい…さもないと…」

そっぴい志保が手に持っているのは、怪しげな注射器とカプセル。

そして彼女の顔は、ゾクツとするような笑み。

新一と快斗は顔を見合わせ、

新&快「い、いただきます!!!!!!」

声をあわせて言った。



## 第八章「大阪からの訪問者」(後書き)

あれ？進展あつたかなあ？

それと更新遅れてすみません。

『また逢える』のほうに集中してたことと  
自身のスランプで……

## 第九章「お前の好きな人」

新「で？なんのようだ？服部」

昼食を恐怖心のおかげで早急に食べ終えて（レーズンと魚は平次に食べさせた）

買い物があると志保は荷物持ちとして快斗を連れて行った。

平「遊びに来たのもあるけど、ちよつと工藤に聞きたいことがあつてな」

新「聞きたいこと？」

平「なあ工藤…お前…毛利の姉ちゃんに思い伝えたか？」

新「……………」

平「じゃあ小つこくになったことは？」

新「……………」

平「何で伝えへんねん！小つさいころはあんなに言いたがっていたのに」

新「俺にもわかんねえんだよ…なんかいいたくないって思うんだよ」

平「…じゃあ質問変えんで…黒羽たちが帰ってきてからどうや？」

新「志保たちが帰ってから？」

平「せや。黒羽たちが帰ってからの二人のこととか…」

新「そうだな…志保たちが来てからか…そついや志保が良く笑うようになったな」

あ、そうそつ…志保たちが転入したときはあいつ…冗談言つたな

…珍しいだろ？

あと、そついえば志保がなあ……………」

はあ

平次は心の中でため息をついた。

（なあ工藤… 氣い付いてるか？ お前の台詞のたった三行に“志保”が四回も入ってんで？

それにお前は俺が“黒羽たち”と言っても“志保たち”に直すんやな…

でも此処までくると無意識とは思えへんぞ…

もしかしたらにげとるんかな？ こいつ… まったくアホやで）

新「服部？」

新一は心の中で呆れている平次に声を掛けた。

平「なあ工藤… 自分頭大丈夫か？」

新「はあ？ 何でお前にそんなこと言われなきゃいけないんだよ」

平「… なら教えたるわ… お前の本当の気持ちを…」

新「何言ってんだ？ 服部」

平「お前… 宮野の姉ちゃんのが好きやろ？」



## 第十章「誤魔化してきた想い」

新「…何言ってんだ？服部…俺が好きなのは…蘭…だ」

平「せならなんと言わへんねや？」

新「それは……」

平「好きな奴に誤魔化さんでもええやろ」

新「………」

平「それは、下手に本当のことを話してあの姉ちゃんを侮辱されなくなかったのと

『待つてろ』と言ったのに心変わりしてしまった自分を悟られなためや」

新「ち……ちが……う」

平「お前とて人間や…好きな奴が変わることもある。

もう自分に嘘つくのはやめろや…苦しいんやろ？自分…」

新「……っ……」

気づいていた。

自分の気持ちが変わったことに…

でも、俺のせいで縛り付けていた蘭への負い目がそれを許さなかった。

自分に蘭が好きだと言い聞かせてた。

—でも…良いんだよな？他の人を…志保を好きになっても…なあ服部

新「ありがとう…服部」

平「お安い御用や！それよりさっさと気持ち伝えて来い！」

新「……おう！」

新一は志保のいるデパートに向かって走っていった。

志「だから違うって言うてるでしょう」

買い物を済ませてお礼として、黒羽君と喫茶店に入った。

快「違うないよ…志保ちゃんは新一のこと好きでしょ？」

彼の言うことは当たってる…

でも、当たっているとはいわない。

叶わない恋だと分かっているし、第一叶ってはいけない恋だ。

快「ねえ志保ちゃん…もういいんじゃないの？罪の意識にとらわれてるんだろうけど」

もう誰も攻めたりしてないよ？新一も平次も…もちろん俺も幸せになってもいいんだよ？」

なのにどうしてこの人は

快「俺は…俺は志保ちゃんに幸せになってほしいんだ」

彼への想いを必死になって扉に閉じ込めた…  
どうしてその扉をこじ開けようとするの？

快「おっとタイムアウトだな…じゃああとは頑張って…自分に嘘つかないようにね！」

黒羽君は立ち上がって喫茶店を出た。  
彼と入れ替わり現れたのは

志「…工藤君」

## 第十一章「伝わった気持ち」

快「たっだいま」

帰ってきたのは…黒羽？

とりあえず、玄関に向かう。

快「お、平ちゃんまだいたんだ」

もうつつこむ気にもなれへんわ。

でもこいつが帰ってきたということは…

快「…うまいことやったんだね平ちゃん」新ちゃんが走って俺たちの元に来てさあ」

笑顔で話す黒羽…

何でお前は幸せそうに笑えるんや？

だってお前は…お前は…

平「お前は大丈夫なんか？…お前はあの姉ちゃんのことを好きやなかったんか？」

快「……さあね？」

志「どうしたの？工藤君息を切らして」

はあはあ

と言いながらやってきた彼に驚きながら尋ねる。  
息を整えて彼は真面目な顔で私を見た。

新「もう自分に嘘をつきたくないからな」

自分に嘘を？

どういう意味？

新「志保…俺はお前が…好きだ」

……………は？

今何を？

好き？

何を言ってるの？

貴方には彼女が…

志「冗談でしょ？」

新「…本気だ…俺はお前が好きだ」

志「…何を言ってるの？」

貴方には彼女がいるじゃない！だめよ！絶対にだめ！！」

新「…どうして？」

志「知ってるでしょう？私は犯罪者よ…貴方の時間を奪ったのよ

私は…私は貴方に最も憎まれるべき人間なのよ！！」

新「本当に…そうかな？」

志「どういうこと？」

新「だってさ薬はお前一人で作ってたわけじゃないし、命令されてたんだろ？」

志「それでも…」

新「それにだ…別にお前がいなくてもいずれあの薬は作られていた筈だろ？」

志「……………」

どうして私の周りには優しい人ばかりなのだろう？

工藤君に博士、服部君そして黒羽君

そついや黒羽君が言ってた

『幸せになっていい』

本当に？

本当にいいの？

新「返事を改めて聞かせてほしい」

今硬く閉ざした扉が…開いた

志「私…も…好き…工藤君…の…こと…が」

新「ありがとな…向き合ってくれて」

志「工藤君…」

新「苗字じゃなくて名前で呼べよ」

志「新…ごめんね素直になれなくて…本当に好き…だから」

そう言うつと周りから歓声が上がった。  
しまった

此処は喫茶店…

客など普通にいるのだ

新一と志保は顔を真っ赤にした。

そんな二人に笑いが起こりついには

客「…キ…ス…!!キ…ス…!!キ…ス…!!」

キスコールが起こった。

もう逃げられないな

そう第六感が告げた。

俺はゆっくり

どうしよう

と迷っている志保に歩み寄る。

目の前に立ちそして…

喫茶店で再び歓声が起こった。



## 第十一章「伝わった気持ち」（後書き）

第一章から全ての台詞に発言者の名前を入れました。

これから先志保が新一と呼ぶので蘭と区別付きにくくなるので…  
にしても全部は疲れた〜

## 第十二章「恋人会議」

新一と志保が素直になり恋人同士となったところ  
毛利探偵事務所に1人の少女がやってきた。

ピンポン

蘭「はい」

蘭がドアを開けると其処にいたのは

和「蘭ちゃん久しぶりやな」

蘭「あ、和葉ちゃん久しぶり〜あれ？服部君は？」

和「平次？平次なら工藤君ちやと思うけど…」

蘭「へ〜」

和「それよりどうなん？工藤君とは」

蘭「どうもなつてないよ…どちらかと言うと関係は悪くなっちゃったし」

和「どういことや？」

蘭「新一が帰ってきたと同時に二人の転校生が来たんだ…」

二人とも新一の前からの知り合いらしくていつも一緒にいるの

…」

和「…そうなん…どういうつもり何やろ…工藤君…」

せや！工藤君に聞いてみいひん？本当の気持ちを」

園「お、ナイスアイディアだね！！」

蘭「うわ！園子！？いきなり登場しないでよ！びっくりするでしょ！？？」

二人が話しているとき乱入してきたのは、蘭の親友の園子だ。  
蘭もそうだが園子も志保と快斗のことを気に掛けている。

蘭「でも…今すぐだと迷惑にならない？」

和「じゃあ明日にしようか？」

園「賛成！！」

蘭はたしなめようとしたが自分も実際気になっているので止めなかった。

志「ほんつとありえない！！」

新「悪かったって志保！」

新一と志保はと言うとこんな感じだ

理由はもちろんさっきの喫茶店でのことだ。

志「あんなところでやらなくてよかったでしょ！？」

新「しゃーねーだろ！？逃げられないと思ったし！それに恋人同士なんだからいいだろ！？」

志「…そりゃあ嬉しかったけど…」

新「なんか言ったか？」

志「な、何も言っていないわ！工…新一」

新「???」

新一の頭にはクエスチョンマークができていた。

その後、家に帰ると快斗と平次から祝福を受けた二人だった。

## 第十二章「恋人会議」(後書き)

なにこれ!?

史上空前の酷さ

文はへたいし読みにくいし…  
すみません本当にこんな文で

### 第十三章「工藤邸に」

翌日の朝十時ごろ

工藤邸に三人の少女がやってきた。

和「此处が工藤君ち？ごっつでかいやん」

蘭「無駄にでかいでしょ？新一がいなかったときの掃除とか大変だったんだから」

園「ほんとそうよね…あれ？洗濯物がある」

和「あつたら変なん？」

蘭「新一はいつも面倒くさがって洗濯機の乾燥機能を使ってるんだけど」

園「なんか1人分にしては多くない？」

和「そーいやそうやな…二、三人ぐらいって感じやな」

蘭「あれって女物じゃない？」

園「え？…本当だ…どういうことだろう」

和「入って問い詰めたらええやん！！」

園「それもそうね」

三人がチャームを押そうとすると

蘭「え？」

和「どうしたん蘭ちゃん」

蘭「これ…」

蘭が指差す先には表札  
それには

『工藤 新一』

黒羽快斗

宮野志保 』

と書いてあった。

園「黒羽君に…宮野さん？」

和「どないなつとるん？この二人つて例の転校生やる？」

蘭「うんそうだけど…まあ、早く入ろうよ」

和&園「…そうだね（やね）」

ピンポン

？「…だれや！？」

和「へ、平次！？」

平「何や和葉かいな…まだ帰らへんぞ！」

和「私だつて帰りとおないわ！それより工藤君おる！？」

平「工藤は今……おるで！でもまだ寝取るとさかいまっとなれや」

あれから三十分いっこうに出てこない。

何してるんだろうそう思つてるとドアが開いた。

平「待たせてすまんのぉ…工藤がなかなか起きんやつたんや」  
新「だからって、ベッドから落とさなくてもいいだろ…」

いてて

と、右の頬を新一は押さえている。

平「まあとにかく入りや」

部屋の中は綺麗だった。

本当に新一の部屋じゃないみたい。

和「なあ工藤君ちよつと聞いてええか？」

新「…なんだ？」

和「表札のところに黒羽快斗とか宮野志保とかあったけどあれは？」

新「ああ…あの二人は家がなくなったからうちに引っ越してくるよ  
うに進めたんだ」

園「家がなくなった？」

新「…詳しいことは話せない」

蘭「……………」

和「あともう一つ…「ただいま」

和葉が本題に入ろうとしたとき志保が来た。

志「なんなの？いきなり買ってきてくれって…」

愚痴を零しながら買い物袋を平次と快斗に渡す。

園子と和葉は、志保の突然の登場にムツとした。

志「あら…毛利さんに鈴木さんに遠山さん…こんにちは」

蘭&園&和「」「こんにちは」「」

心外だったが礼儀として挨拶した。

志「それで？服部君」

平「なんや？」

志「新一は何処？」

当然女性人からはハア！？と言う反応が出る。

新「なにいつてんだよ！？俺なら此処にいるじゃねえか！」

志「ハア…私をだませると思ってるの？黒羽君」

蘭&園&和「」「黒羽君！？」」「」



## 第十四章「いくらお前でも」

？「やっぱり志保ちゃんには敵わないなあ…これ結構大変だったんだよ？」

蘭「え？え？新一？」

志「髪をいじったくらいでだませると思ったの？」

甘いわよ？それでどうしてやったの？」

？「だって平ちゃんがどうしても言うんだもん♪」

平「俺の所為だけにすんな！お前かて楽しんでたやろ！！」

志「それより三人が混乱してるわよ…さっさと髪を直しなさい」  
？「了解」

グシャグシャ

快「ごめんね三人ともだましっちゃって♪」

君は始めましてだね…俺は黒羽快斗…よろしくね♪」

三人は未だに啞然としている。

志「で？新一は何処にいるの？」

平「工藤やつたら向こうの棚の中に放り込んで…しもた！ほったらかしやった」

急いで棚をあけると軽く酸欠しかけた新一がいた。

新「ハアハア…し、死ぬかと思った」

快「ごめんね新ちゃん」

平「ホンマにすまんのお…工藤」

悪気のない様子の二人に新一は危ないオーラを放つ。

平「なんかやばないか？へんなオーラが見えんで…黒羽」

快「うん…たぶん超やばい…と思う…というわけで」

平&快「…につげろ」

新「殺す殺すころ——す！！！」

志「ハア…こうなったらとまらないわね」

新「で？何しに来たんだ？」

二人にたつぷり罰を与えたあとソファーに座り三人に問いかけた

園「……ねえ新一君…蘭のことどう思ってる？」

新「……………」

予想どおりと言えば予想どおりの言葉だった。

新一としても早く言わなければならない内容である。

和「蘭ちゃんずっと我慢してきたんや…はっきり言ってや」

新「……………」

はっきり…か

はっきり言うとお前らは志保をせめるだろう？

それだけは避けたいんだ…できれば…

でもそれは…無理みたいだな…

—ごめん蘭…俺はお前を傷つける

新「俺…は…志保…が好き…だ」

蘭「…どうして？待ってるって言ったんだよ？帰ってくるって…

死んでも帰ってくるって…なのはどうして？」

新「…すまないと思ってる…俺のせいで縛り付けて…でも」

蘭「いや！聞きたくない！私は新一が好きなの」

新「……………」

新一が押し黙ると蘭は標的を志保に変えた。

蘭「…貴方さえいなけりや良かったのよ…」

貴方さえいなけりや私たちは結ばれるはずだったのよ…

消えてよ！貴方なんていなくなってしまう方がいいのよ！…」

これが嫌だったんだ

アイツは誰よりも傷つきやすい奴だから…

きつと自分を責めてまた俺の元から離れてしまう

ドタッ

新「志保!!」

…予想どうりだ…あいつが出て行った

俺は当然志保を追いかける

でも次の瞬間誰かが俺の腕を掴んだ

新「離せ蘭!!」

蘭「あんな人ほつといてもいいじゃない!

あの人の何処がいいの!?ただの八方美人じゃない!

あの人なら裏切るかもしれないよ?私はそんなことしないよ  
知ってるでしょ?だから……ね?」

…こいつ…何も知らねえくせに

蘭「あんなのただの「蘭!!」!」

新「それ以上何か言ってみろ…いくらお前でも本気で殴るぞ」



## 第十五章「お前しか」

蘭「!!!!!!」

新「お前が志保を悪く思うのは分かる…

でも本当の…素の志保を知らないお前が勝手なことを言うな…

俺はそんな奴のこと好きになれるし、なりたくもない」

蘭の手の力が緩んだ。

新「ごめん蘭」

最後にそういうと俺は走った。

きつと傷ついたであろう彼女の元に…

全「「「「「……………」「「「「」

新一が去ってから、工藤邸では沈黙が続いていた。  
そのとき、快斗がスツと立ち上がった。

平「黒羽？」

快「俺もいつて来るよ」

平「じゃあ俺も」

和「ちよつとまちい」

平「…何や」

和「何であんたらはあの二人の味方なん！？」

平「…俺らはいいつらの幸せを祈つとるからな」

和「何でなん！？蘭ちゃんが苦しむの見てきたやる！？」

快「…平次…俺は行ってくる…お前は此処で相手をしてやってくれ」

平「…わかった」

和「ちよつ、ちよつと」

快「…最後に一つ教えてやるよ」

今日俺が変装した理由…それは毛利蘭を試したんだよ  
志保ちゃんに勝てるかどうかをな…今日わかったよ…  
あんたじゃ一生かかっても宮野志保には勝てないってな」

快斗はそう言うと、新一たちを追いかけた。

新「くそ！何処行きやがった」

あれから新一はいろんなところに向かった。

公園、学校…他にも志保がよく行ってる場所。

でもアイツはいない…何処だ！？ぜんぜんわかんねえ

快「新一！！」

新「快斗！？」

快「志保さんは！？」

新「心当たりは一通り探したんだが…」

快「なにか…思い出の場所とかは！？」

思い出の場所…

出会ったところは小学校…こんな時間に行ったら怪しまれるだろ  
告白したのは喫茶店だが其処は通った

考え込んでいる俺の頭に一つの女性が浮かんだ。

——明美さん！？

まさか！？

新「あそこだ！！！！」

志「此処なのね…此処で「明美さんがなくなっただ」

志「し、新一!？」

息を切らせながら新一がやってきた。

新「きつと此処にいると思ってな」

ゆっくり…でも確実に志保によっていく。

志「来ちゃ駄目!今からでも遅くないから毛利さんのところに戻って」

新「……………」

新一は歩くのをやめなかった

志「お願いだから…私のことはいいから…」

新「もう無理だよ」

新一は志保の目の前に立ち抱きしめた。

新「もう…無理なんだよ…俺はもう…お前しか愛せない」

志保の目から雫がこぼれた。

志「…私……も」

新「高校卒業したら…結婚してほしい」

志「うん…」

新「志保…愛してる…」

志「うん…」

俺は此処で

“ 明美さん貴方の分まで志保を幸せにします ”

そう誓った。



## 最終章「ハッピー！」

――6年後

？「ママ、パパの試合始まっちゃうよ」

？「早く早く」

志「先に行つてて…すぐに行くから…あい…コナン」

あい＆コナン「はあゝい」

あれからすぐに私たちは結婚して子どもを授かった。

双子の男女だったので『あい』と『コナン』にした。

さすがに『哀』にするわけにもいかないので平仮名にした。

毛利さんというと、あれからしばらくは立ち直れなかったけど

大学に入って幸せを掴んだみたい。

来月には第一子が生まれるらしい。

ちなみに今日はワールドカップの決勝戦

高校卒業後東京スピリッツに新入はスカウトされた。

その後、黒羽君も入団試験を受けて合格。

この二人はいまや『サッカー界のKKコンビ』と言われるほどになり  
日本代表にも選ばれた。

日本代表は二人の活躍で順調に勝ち進みブラジルと頂上を競う。

ピー

試合が始まった。

きっとあの二人ならやってくれる

そう信じた

その数分後、新一のゴールで一点先制した。

トウルルルルルルル  
ガチャ

志「もしもし」

？「もしもし志保ちゃんですか？」

志「ジョディ先生！」

ジ「はい」日本は「クールキッドの活躍で勝ちましたネ」

そう日本はあの一点を守りきり優勝したのだ。

ちなみにジョディ先生とはたまに連絡を取り合っている。

組織がなくなってもこういう関わりを持てることは嬉しいことだ。

志「伝えておきます」

ジ「オウ…志保ちゃん前より元気でゝすね」

志「そうですか？」

ジ「もちろんでゝス…その様子だと表情もよさそうですネ」

志「彼のおかげでしょうか？」

ジ「そうかもね」

それから私たちはたくさん話した。

そろそろ終わろうとしたとき

ジ「最後に一ついいでゝすか？」

志「なんですか？」

ジ「Are you happy?（貴方は幸せですか？）」

志「Yes・I・m happy!（はい、幸せです）」

私は彼女の質問に即答した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6833e/>

---

ハッピー?...ハッピー！

2010年10月9日17時18分発行